栃植地域まちづくり協議会　人権・同和部会　　２０１８年　６月号

『さあ、みんなで、考えよう』

「やまなみ工房」山下完和施設長のお話より

５月２２日（火）に栃植１２区による栃植地域人権啓発合同事業で年２回実施する合同フィールドワークの１回目（近隣フィールドワーク）として、滋賀県の甲南にある「やまなみ工房」へ４６名で行きました。最初に山下施設長からお話をうかがい、そのあと２班に分かれて工房内を案内していただき、作業の様子を見せていただきました。今回は、その時にうかがった山下施設長のお話を紹介します。

みなさんは、障がいってどんなイメージを持っていますか？障がいにはいろいろあるんです。そして一人ひとりの障がいの状態はみんな違います。一人ひとりに人格があり、個性があり、心があり、気持ちがあり、感じることも価値観も違います。民生委員をしていたぼくの父は数年前に台所で脳梗塞を起こして倒れました。父はその日から自分でトイレに行けなくなりました。利き腕が動かなくなりました。その日から介護される身になりました。ぼくは障がいを持つ家族になったんです。

障がいは大きく分けて３つです。身体障がい、知的障がい、精神障がいです。ここにいる人も先生も町の人も、すべての人が安心して豊かな毎日を過ごすためには何が必要か。それはお互いを認めあうこと、支え合うこと、そして正しく理解することです。身体障がいが障がいのある人の中でいちばん人数が多い障がいです。身体障がいには、視覚障がい、聴覚障がい、肢体障がい、内部障がいなどの障がいがあります。目の見えない知り合いがいました。「目が見えなくて、たいへんだね。」って思いますか。その方は生まれつき目が見えません。お父さん、お母さんの顔も、友だちの顔も見たことがない。テレビも見えない。ぼくはその人に、「目が見えないってたいへんだね」と言ったことがあります。でもその彼から返ってきたことばは「ぼくは目が見えない。でも生まれてずっとこの目が見えない自分の身体のことを不幸だとかかわいそうだとか思ったことがない。大好きなお父さんとお母さんに生んでもらった自分の今の命やこの身体にほこりを持っている。ひとと比べてどうだったとか、そんなことは一切思わない。ぼくはぼくでいいんだ。だから、ぼくは不幸じゃない。ぼくにとっての障がいはこの目が見えないことが障がいなのではなくて、まわりの人の偏見や差別をする心、それがぼくにとってのもっとも辛くて悲しい障がいなんです。」障がいというのは人と人の間に生まれるんです。人と人の間につくりだしてしまうんです。みんながみんな、「お互いのことを君は君らしくしてね」と認めあえたら障がいなんてなくなるんです。目が見えるか見えないか、耳が聞こえるか聞こえないか、足で歩けるか車いすで移動するか、学校の勉強ができるかできないかではないんです。今、この現代の社会において、どういう特性を持った人が多数なのか。その多数の人たちが、多数の人たちのために自分の都合のよいようにルールをつくったり、まちや道路をつくったり、コミュニケーションの方法を決めたり、そのために、それを使うことの出来ない少数派の人たちが障がい者というレッテルをはられたり、社会のすみに追いやられているだけなのかもしれません。やまなみ工房の展覧会に４０人もの耳が聞こえない、お話ができない人が来てくださったんです。その会場で、耳が聞こえる、お話ができるのはぼくだけです。でも、ぼく以外の人は楽しそうに手話を使って、彼らにしかできない会話の方法でとても楽しそうに会話をしていました。ぼくには彼らの言っていることがさっぱりわかりませんし、ぼくが考えることを伝えても理解してもらえません。大勢、少数と置き換えて考えたらわかることが見えてくるんです。

「やまなみ工房」には知的障がいの人もたくさんいます。知的障がいというのは、知的機能の障がいが発達期、おおむね１８才までにあらわれて、ものを考えたり表現したりすることが同じ年齢の人と比べてゆっくりだったり特別な支援が必要な人のことを言います。５０才の知的障がいのある方が「やまなみ工房」におられます。その人は今も自分の名前を書くことができません。１ケタのたし算をすることができません。それは教育のせいでもなく、彼が努力を怠ったわけでもなく、ご両親のしつけが悪かったわけでもありません。彼は医学的に「あなたの脳機能の発達は３才レベル以上には発達しません。」と言われました。障がいは病気と違って、治療すれば治るというものではありません。身長や走りの速さは人によって違います。知的能力が人によって違うのは決しておかしいことではありません。家族や友だちや周囲の人々がその障がいについてよく理解して障がいがある人が育ちやすい環境を整えることによって、社会的生活能力が向上していくことがあります。それでも障がいがなくなるってことはないんです。身長が人によって違い、走る速さも人によって違います。知的能力が人によって違うのは、全然不思議なことではありません。知的障がいのある人も努力すること

でいろんなことができるようになります。歩みは少し遅いかもしれません。努 力 していることは 周 囲にはわかりづらいかもしれません。それでも一 生 懸命、かけがえのない人生を送っているのはみなさんやみなさんの家族と一緒なんです。知的 障 がい者は自分が悪くて 障 がい者になったわけではありません。もしも、知的な 障 害がある人があなたの好みにあわなかったとしても、自分との違いがたくさんあったとしても、そのことによって差別したりいじめたりしたら、彼らはどれだけ悲しい思いをすることでしょう。もしそれが自分だったら、自分の家族だったら、どれだけつらいと思いますか。ぼくはやまなみ工房の人たちを尊敬しています。一 生 懸命努 力 していることはもちろんです。でもそれ以 上 になぜ尊敬できるか、それは、ひとの悪口を絶対に言ったりしません。ひとの嫌がることをしたりしません。誰にでも優しく接します。そして大好きなことを一 生 懸命頑張ります。他人と自分を比べたり、落ち込んだりしません。毎日、ひとのすてきなところをさがして、それを言葉にしてくれるんです。ひととして、すばらしい彼ら自身をぼくは 心 から尊敬していますし、ぼくもそういった人間になりたい。人々が人と人の 間 にうみだす 障 がいがなくならない限り、どれだけ便利な道具や街が安心して生活できる環 境 になっても、その人たちは社会に出ることはできないでしょう。 障 がいそのものをなくすのは、彼らや家族ではなく、ぼくたち自身なんです。 障 がいは、社会、そして「あなた」に関係しているのです。社会的なバリアは 障 がいのある人たちにとって、とても大きな「 障 がい」です。まわりの人たちの偏見こそが「 障 がい」をつくり出しているのかもしれません。 障 がいを理解することは、 障 がいのある人にもない人にも、豊かな生活につながります。 障 がいのある人は、ごくあたりまえの社会生活がしずらいことが多くあります。 障 がいのある人も、ない人も、家族も、このまちの人も誰もが生きがいをもって 幸 せに暮らす。それはみなさんの、 隣 の人、すべての人を正しく理解しようとする、その 心 を持つことがすべてです。「ぼくの身体は動かない。でも、 心 は動く。ひとの気持ちもわかる。思いやることもできる。世の中には身体が動くけど、 心 が動かない人がいる。ぼくはやっちゃいけないことだってわかるし、そんな人にはなりたくない。」やまなみ工房の人はぼくにそう話してくれました。

伊賀市の総人口は９万４千２百 ４９人。これは平成２８年の４月の段階です。２万９千人は６５歳以 上なんです。６％の人が 障 がい者と呼ばれています。身体 障 がい者の方は５.１％で４８０８人います。 療 育手 帳 という知的 障 がい者の人がもつ手 帳 を所持している人が７５８人。精神 障 がい者の人は５７０人いらっしゃいます。しかし手 帳 を持つことで差別されることを恐れて手 帳 を持ってない人もいるので、本当はもっと多いです。そして伊賀市と名張市をあわせて難 病 患者と言われる人は１３５０人います。どんな 病 気なのか、なぜそうした 病 気になるのか、治す 薬 も医 療 もまだないです。

「やまなみ工房」は今から３０年ほど前にできました。 障 がいがあるために字が読めなかったり、計算ができなかったりで一般の会社などで勤めることができなかったんです。障がい者も働きたいし、友だちもほしい。そうした人たちのために「やまなみ工房」はうまれました。そのころは今のようなりっぱなところじゃなく６畳二間で内 職 をやってました。いろんな時代がありました。「あそこへ行ったら危ないよ」「うつるよ」「怖いことするよ」「きたないよ」「何か悪いことしたら、あそこに入れられるよ」そんなことを目の前で言われたこともあります。全部、間違いです。うつりません。怖くありません。借りられる場所もなくて、ご家族の畑 を借りて自分たちで土をならしてあちこちで廃材をもらって、つぎはぎだらけの作 業 所を建てたんです。ぼくたちはだれからも制約を受けることなく過ごせるこの場所が大好きでした。今から２０年くらい前に地域のみなさん、行 政のみなさんに「こんなすばらしい作品をつくる人たちをあんなみすぼらしい場所でやらせておいていいのか、あの人たちこそ大事にしなくてはいけない」とおっしゃっていただいて、この場所を建てていただいたんです。ここで一人ひとりの目的に心じた仕事をしています。月曜から金曜までで月１回土曜 出 勤があります。土日 祝 日はお休みです。送迎で来て10:30に朝の会をして、作 業 を開始し、12時に給 食 を食べ、１時から３時まで午後の仕事をして3:30に送迎バスで帰ります。この 働 く場所では、いろんな 行 事があります。毎月、遊んでばかりだねと言われます。でも、これには理由があるんです。 障 がいがあるがゆえに皆さんと同じように様々な経験をすることがあきらかに少ないんです。彼らがまちに出歩くとジロジロ見たり、後ろ指をさしたりする人がまだまだいるからです。だから彼らはまちに出ることをいやがったりします。早く 障 がいがある人もない人もどんな人でも楽しくまちのなかで過ごせる、そんな日 常 がくればいいなと思っています。６０歳になって初めて本当の海を見た人、５０代で近所のコンビニにはじめて行った人がいました。なかにはお父さん、お母さんに先立たれ、一人で生活することが困難になり、お父さんお母さんが残してくれた自分のおうちで住むことを周りの人々が許してくれなかった人もいました。「 障 がいがある人を一人で生活ささんといて。何が起こるか不安やわ」というんです。 障 がいがある人も人です。一人でりっぱに生活する人もいます。正しく理解もせず、こうだああだと決めつけて、人のことを判断して、そのことで自分以外の誰かを不幸にしてしまっていることをつくりだしてしまう。だから正しく理解することは本当に大切なんです。

やまなみ工房はいろんな地域から来ていて、みんな自宅までお迎えに行っています。なかなか電車の切符を買ったり、バスに乗ったり、そういうことを覚えることがむずかしかったりもします。「やまなみ工房」は毎日給 食を提 供 しています。自分でスプーンを持てない人もいらっしゃいます。どんな状 況 であれ、一人ひとりがおいしく食べられるようにつくって、介助して提 供 しています。ここで働いている方々のお給 料は月給でだいたい平均で４０００円くらいです。それには理由があります。

やまなみ工房にはいくつかの班があります。そのなかの１つに「ぷれんだむ」という班があります。自分の 力 で股関節が曲がらない人がいます。股関節が曲がらないと、ずっと足は曲がらないまま、歩くときだってまっすぐで。だからたった１ｃｍの段差でつまづいて大けがすることだってあるんです。彼女はやまなみで信頼できる人に手伝ってもらって足を伸ばしたり曲げたりしながら、いつまでも自分の 力 が 衰 えないように訓練

しているんです。
「たゆたゆ」という班があります。変な帽子をかぶっている彼がいます。彼と一緒にアピタにいくと、ジロジロ見られます。彼はこの帽子が好きで好きでたまらなくてかぶっているのではないんです。彼にはてんかん発作という 病 気があって、無意識のうちに１日に何回意識をなくして倒れるかわかりません。だからといって、「いつ倒れるかわからないので危ないから、ずっとベッドの上で寝てなさい」って言われたらどうですか。彼だって 働 きたいんです。友だちといっぱい遊びたいんです。もし万が一、倒れたときに自分の 頭 をしっかりと守ってくれる 命 を守る帽子なんです。同じてんかん発作を持っている子がいました。いつ起こるかわからない発作があるために２０才の地元の成人式に参加することができませんでした。彼女は地元の成人式ではなく「やまなみ工房」で盛大な成人式を行いました。でもその１週間後、１日の疲れを癒す入浴中、お母さんがほんの数十秒目を離したあいだにお風呂の中で発作が起き、そのままかえらぬ人となってしまいました。
「もくもく」班は、１００均で売っているようなタッパーにシールを貼って、１０個まとめて 袋 づめして１０円、５千個つくって５千円。１ヶ月かかってみんなでがんばって１万個つくっても１万円。それをみんなで分けたらいくらになりますか。月 給 が少ないのはそういうところからきます。
ｈｕｇｈｕｇ(はぐはぐ)班という班があります。「ぼくは喫茶の仕事がしたいんだ」という人がいて、一 生 懸命まちで彼のことを雇ってくれる喫茶店を探しましたが、知的な 障 がいがあるがゆえに雇ってくれる喫茶店は１つもありませんでした。この方の夢を叶えるために、やまなみ工房に喫茶店をつくりました。彼はスポーツ万能で 力 持ちでした。「日本一のマスターになるんだ」と言って喫茶店を始めましたが、立つことがむずかしくなり、お盆を持って運ぶことが 難 しくなりました。運べないので、カウンターで日本一きれいにコップをみがくマスターになろうと思いましたが、コップが持ちにくくなり、お 客 さんが来たら元気に「いらっしゃいませ」と言おうとがんばりました。やがて声が出にくくなりました。彼は難 病 の筋ジストロフィーという 病 気におかされて、どんどん自分の筋肉が無意識のうちになくなっていき、ついには 命 を落としてしまったんです。同じ喫茶店で 働 いていたバンダナを巻いていた 女 の人は聞こえません。話せません。その人がどうやって喫茶店の店員をするんでしょうね。そのことを理解して来てくれるお 客 さんもいません。彼女はとびっきりの笑顔と真 心 でお 客 さんに接するんです。お 客 さんは聞こえません。でも、彼女はいつしか店の大人気の店員さんになりました。「彼女と会話するのが大好きで、今日もこの喫茶店に来ました」というお 客 さんがどんどん増えました。ぼくは手話は使えませんから、彼女とはお 話 はできませんが、でも彼女とお 話 をするのがすきでした。 心 と 心 が通じ合う、お互いそういう努 力 をしてはじめて人と人はわかりあえます。
Ｉさんは、お話しすることも文字を書くこともできません。彼女は 勢 いよく線をつかって描きます。 鳥 にはなかなか見えません。自分の 表 現に自信を持って、毎日絵の具を走らせます。この絵がもう何枚も何枚もあります。みんなはこの絵を見て「変なの」と思いますか。この絵を見て、「すてきだね」と言ってくださる人がいました。そのすてきだねと言ってくれた人が彼女の絵を洋服にしてくれたんです。それが世界１４カ国で販売されて、今ではHey! Say! JUMPの八乙女くんや山田くん、Ｓｅｘｙ　Ｚｏｎｅの佐藤くんなど、いろんな人が、「この鳥の絵、いいね」「かっこいいね」「この洋服着たいね」と言ってくれて着てくれています。ぼくは、こんなに有名な人たちがすごいと言ってくれる絵を描けないです。
Ｙくんはねんどでいろんなものをつくりました。そして今、お地蔵さんのような人 形 をつくっています。彼はそうしたものを３０年間で、４万体以 上 つくっています。そして今では、世界 中 でかれのつくる人 形 が、「おもしろいね」「かわいいね」といって、たくさんの人に愛されています。彼はみんなのなかにいることがとても苦手です。 集 団のなかにいることができません。 集 団のルールが守れないからでも自分勝手なわけでもないんです。みんなのなかにいたら不安になります。だから彼はみんなが作 業 時間のときに作 業 をせず、みんながお昼ご飯を食べに行ってお部屋に誰もいなくなった１５分間にやってきて、楽しそうにねんどをします。「みんなと一緒でなかったらダメ」という勝手なルールがぼくたちをだめにしてしまうことだってあるんです。
ずっと丸だけを縫っている人がいます。「こんなものしか縫えないのか」と言われたときもありました。丸しか縫いません。でも今、彼女の作品は世界各国の展覧会ですばらしい評 価を得ています。
Ｋさんは、新聞紙にねんどをまるめてはりつけて、そこに米粒のようなねんどをいっぱいはりつけています。そして、見たこともないような顔をした人をつくるんです。彼女の作品は今、ヨーロッパやアメリカで展覧会がされています。１つ、２０万や３０万で売れるんです。みなさんはそんなねんどをつくれますか。彼女は美大に行っていません。図工や美 術 の授 業 を受けたこともありません。やまなみ工房の人はみんなそうです。専門的な技 術 を学んだわけではありません。
Ｓさんは糸で絵を描きます。誰かに刺 繍 を教えてもらったわけではありません。ほんとうに細かく縫っています。彼女の作品の展覧会を昨年、東 京 でしたときに、秋 篠 宮紀子さんや元ＳＭＡＰの香取慎吾くんが来てくれました。Ｓさんには苦手なこともいっぱいあるんですけれど、ぼくにはそんな刺 繍 はできません。
耳が聞こえず、しゃべれないので、小さいときから「眠たいよ」「おなかがすいたよ」ということを親に手話でなく絵にして伝えていた人がいます。いつしか絵をかくことが上手になりました。彼女はアートしているつもりはありません。生きるために必要なコミュニケーション法です。今、いろんなところから彼女に絵をかいてほしいと仕事が来ます。かばん、ケータイのケース、パンツのデザインなどになっています。
Ｏさんは毎日毎日怒って、イライラして、そんな毎日が続きました。彼がイライラするとぼくはドライブに連れ出しました。彼はそのドライブ 中 に見たトラックを 瞬 間的に覚えて、そしてそのトラックを描き始めました。今では人を描いています。このあいだ、ＴＳＵＴＡＹＡのＣＥＯの方がＯさんの絵を１０枚、３００万で買っていきました。Ｏさんはみんなと同じように 机 に向かって絵を描きません。いつも寝転んで、ひじをつい

て描きます。「行儀悪いね。もっとちゃんとしなよ」と言ってしまったら、彼はこんなすごい絵を描けないかもしれません。自分のルールとスタイル、それも大切なことですね。

Uさんは、字が書けません。イライラしたときにボールペンを１本持って、グルグルと書くことによって自分の中にあるストレスを発散していました。唯一の表現でした。そのグルグルもデザイナーの目にとまり、世界中の数カ国で洋服になり、小栗旬さんや関ジャニの丸山さん、嵐の大野さんがこのグルグル描いた絵をすてきだねと言ってくれたことによって、Uくんを見る目がかわったんです。

Kさんも不思議です。彼はすばらしい絵をボールペン１本で描くことができるんです。絵とは別にティッシュの空き箱とか不要になったゴミのようなもので、飛行機とか電車とかガンダムとかをつくるんです。何かを見てつくるのではなく、自分で想像しながら立体的につくっていきます。彼の絵も洋服になりました。こうして今、８８人の人がやまなみ工房にいます。みんな自分の大好きなことを自信を持ってがんばっています。

５５才で土木工事の仕事を解雇され、仕事がなくなり「やまなみ工房」に来た人がいます。彼は７０才まで喫茶の仕事をしてくれました。「高齢になってきたし、ゆっくりしよう」と言うと、彼は自分から鉛筆をけずり、えんぴつ１本で絵をかきはじめました。この４年間でかいた絵は９８枚。かいているときはとても幸せそうです。

Sさんと出会って２２年になります。彼女はねんどしたり絵を描いたりしません。２２年間やり続けていること、それは寝るとき以外、ずっとサッポロ一番しょうゆ味の袋を持っているんです。公園に行っても、トイレに行くときだって、ご飯食べているときだって、一途にこの行為をやり続けています。お話はできません。ぼくは、このラーメンを持つことは無駄だと思っていました。だから、「もっと違うことをしようよ」と言って、取り上げたこともありました。でも考えたら、彼女ほど、「私はこれが大好きなんだ」「これをすることが私にとっていちばん大事で、しあわせなことなんだ」そう言っている人はいません。そのことを誰が取り上げる権利があるのか。彼女からたくさんのことを教わりました。「あなたは今のあなたに自信を持っていいんだよ」「あなたは何にまどわされることなく、自分の大好きなことを一生懸命やったらいいんだよ」「あなたはあなたのままでいいんだよ」あるがままの自分が認められ、存在できる場所、自分らしく過ごす日常のなかで生まれたボクのいろ、わたしのカタチ。

ありのままの自分が認められ存在できる場所。それが「やまなみ工房」です。笑顔を大切にしましょう。たった１度しかない人生を楽しくしましょう。幸せに生きましょう。すべては愛です。ありのままを認められること。自分らしく、自分の歩幅で。のびのびと個性豊かに。障がいがあるとかないとか、そんなこと関係なくみんな一人ひとりが１人の人として同じように生活する権利があるのです。障がいは社会、そしてあなたに関係しています。ひとごとではありません。社会的なバリアは障がいのある人たちにとってとても大きな障がいです。その人にある障がいが原因ではありません。人と人の間に生まれる偏見や差別こそが障がいなんです。障がいを理解することは障がいがある人にもない人にもみんなにとっての豊かな生活につながります。誰もが幸せに暮らす、それには理解しようとする気持ちが大切です。お互いを理解し合って、思い合って、それぞれの多様性や価値観を尊重し合い優しく思いやりのある人になりましょう。

文責・橋本浩信

合同フィールドワークの参加者

６月、７月の講演会や研修会の案内

○６月８日(金)　第31回「せいかつ」実践交流会　（終日）　三重県総合文化センター
「部落問題学習をすすめるために大切にしたいこと ～自らが出会いを通して学んできたことを軸に～」(多賀仁さん)［大阪市立住吉中学校］

○６月19日(火)　青山文化センター人権・解放講座　(19:30～) 青山文化センター
「すべての人に「やさしい避難所」を目指して～男女共同参画の必要性と多様性配慮～」(服部亜龍さん)［フレンテみえ］

○６月 20日(水)　上同研連続講座（第１回）　(19:30～)　ハイトピア伊賀５階
「ヘイトスピーチ解消法施行と今後の課題 ～在日コリアン三世、保護者としての思いから～」(文公輝さん)

○７月 6日(金)　いがまち人権センター解放講座（19:30～21:00）　いがまち人権センター
「『差別身元調査』の撤廃に向けて ～とりくみの視点と課題を考える～」(村井茂さん)［大阪府人権協会］

○７月　10日(火)　2018ライトピア人権フェスティバル　(19:30～ 21:00)　ライトピアおおやまだ
「ちょっと心をかしてくれませんか」　(宮﨑保さん)

○７月　12日(木)　青山文化センター人権・解放講座　(19:30～ 21:00) 青山文化センター
「誰もが自分の人生を輝くものにするために」(白井文さん)［大阪府男女共同参画推進財団］

○７月30日(月)　2018年度第１回県民啓発講座　(13:30～ 16:30) 三重県人権センター
講演「世界人権宣言と差別撤廃の課題」(小森恵さん)［反差別国際運動(IMADR]